

# カナダにおける初期日本人移民の歴史的状況

## —Collective Biography を中心に—

天 沼 香

### は じ め に

本稿では、日本人のカナダへの移民が開始された年とされている1877年以降、20世紀初頭に至るまでの日本人カナダ移民の現地での状況について叙述する。

それも一般的叙述に終始するのではなく、黎明の頃にそれぞれ何らかの意味において「活躍」した人物たち——永野萬蔵、工野儀兵衛、本間留吉、池田有親、乃川甚三郎、その他——の軌跡を注視しながら、日本人カナダ移民の初期の状況を見ていこうと考えている。「Collective Biography を中心に」という所以である。

尚、その前にごく簡単に1877年から現在に至るまでの日本人カナダ移民および日系カナダ人に関する100年余の歴史の時期区分を行っておくとともに、意外に知られざる国、カナダの概況にほんの少し触れておくことにする。

### 1. 時期区分

何らかの事象を歴史的にとらえようと試る場合、その事象の推移・展開を明確に把握するために時期の区分を設定しておくことは不可欠の前提となる。

日本人カナダ移民・日系カナダ人の歴史ももはや100年を優に越えているのであるから、長い目で見ればまだ確定的とは言えないまでも、現時点での概略的な時期区分は設けておいてしかるべきであろう。

ブリティッシュ・コロンビア大学で学んだ後、自らもカナダ移民の一員となり現在は東部オンタリオ州ウインザーのウォータールー大学

で教鞭を執る新保満は、「カナダ法制上の日系人の地位の変動によって」<sup>(1)</sup>、日本人カナダ移民・日系カナダ人史を次のように区分する。

第1期—1877年から1907年まで。

第2期—1908年から1940年まで。

第3期—1941年から1949年まで。

第4期—1950年以降現在に至るまで。

各時期を内容的に見てみよう。第1期は、1877年、日本人最初のカナダ移民、永野萬蔵が彼の地に至った年から、日本人のカナダへの自由な渡航が制限される前年まで。

第2期は、1908年、日加間の移民制限のための“gentlemen's agreement”，レミュー（Lemieux）協定が締結された年から、日加開戦の前年まで。

第3期は、カナダ市民であるところの2・3世をも含む、すべての日本人を祖先とする人々が“enemy's alien”（敵性国人）<sup>(2)</sup>と規定されていた全期間。

第4期は、カナダの日系人が法律の上では平等を獲得するに至った時期以降、<sup>(3)</sup>というように新保は区分を設定する。

このカナダの法制と日本人移民および日系人の関わり合いをベースとした新保による時期区分は、移民受け入れ側の国としてのカナダ国内に照準を合わせた区分として非常に有効である。

けれども私は、日本とカナダとの交戦状態（実際的な戦闘が行われていた状態）の期間の特殊性に少し固執して日系カナダ人・日本人カナダ移民の歴史を考えたいので、新保の区分を踏

襲しながらも、それとはやや異なる時期区分を設定することとしたい。

第1期—1877年から1908年まで。

第2期—1908年から1941年まで。

第3期—1941年（12月）から1945年（8月）まで。

第4期—1945年から1949年まで。

第5期—1949年以降、現在にいたるまで。

私の区分は以上の通りであるが、1～5の各時期について次のように命名しておく。第1期を「草創期」、第2期を「排日期」、第3期を「戦時期」、第4期を「戦後期」、第5期を「進展期」（イコール現代）と称することにする。

この時期区分のうち本稿でカバーするのはほぼ第1期—「草創期」から第2期—「排日期」途中までの状況のうちの小状況の一部についてである。

## 2. カナダの概況

面積からいうとカナダはソ連に次ぐ世界第2番目の大国である。日本の26倍の国土、1,040平方キロメートルを領有している。しかし北方圏の多くは年間を通して深く氷に閉ざされた不毛の地であるから、2,400万強の人口のほとんどは、米国との国境沿いの地帯に集中している。

カナダの代表都市、ケベック州のモントリオール、オンタリオ州のオタワ、キングストン、トロント、ハミルトン、ウインザー、サドバリー、サンダーベイ、マニトバ州のウィニペグ、ブランドン、サスカチュワン州のレジナ、ムーアジョー、ブリティッシュ・コロンビア州のカムループス、バンクーバー、ニューウエスト・ミンスター、ビクトリア等々がすべて米加国境に近いところに位置していることからそのことは一目瞭然である。

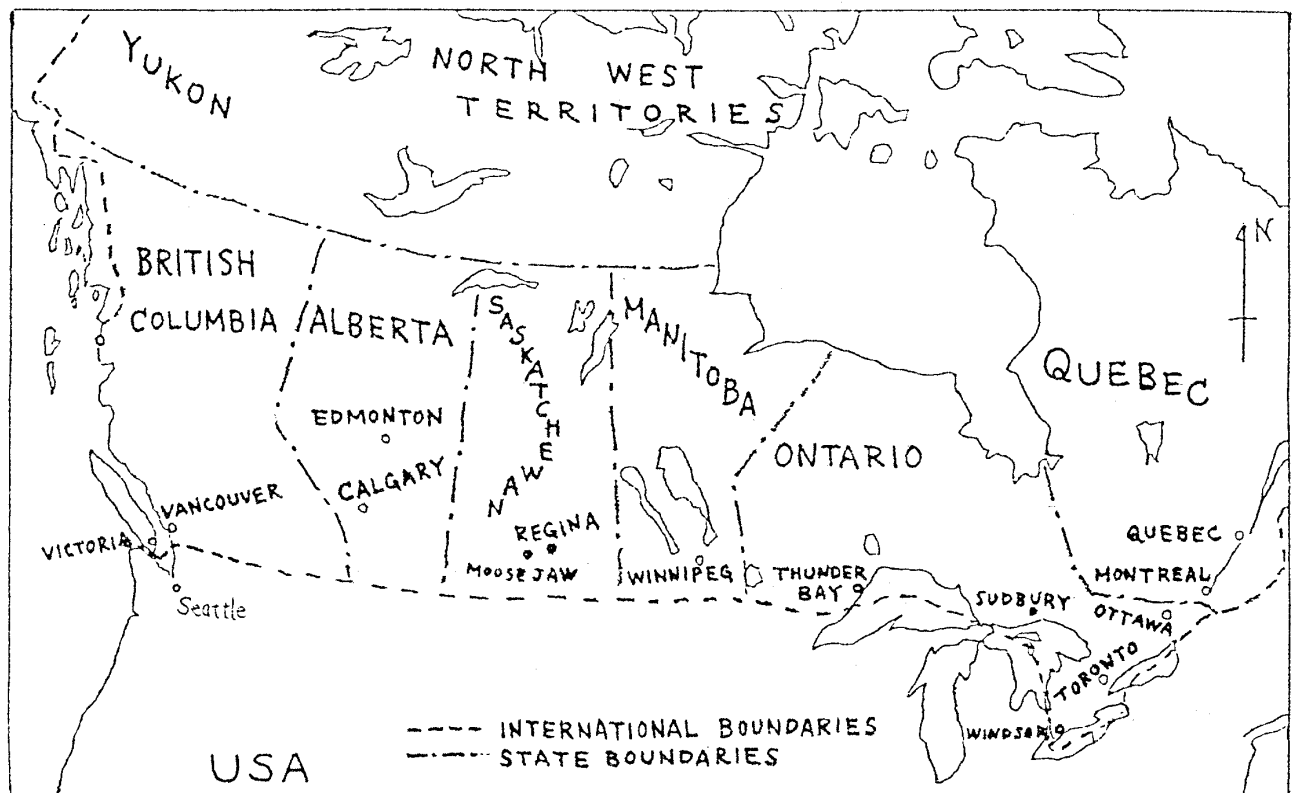


図1 カナダ中心部

対して北方に広がるノースウエスト準州ならびにユーコン準州は面積的には全カナダの40パーセント、しかるに人口は両準州を合わせても僅か6万人程度しかない。まさに「準」州たる所以である。この地方には数多くのカナダ・インディアンの人々、カナダ・エスキモーの人々<sup>(4)</sup>が住んでいる。両準州とも遠くない将来における州への昇格をめざしている。カナダ政府が、真に各人種・各民族間の平等・対等な関係をめざそうとしているならば彼らカナダ原住民の人々により広範な自治権が与えられてしかるべきであろう。

原住民の人々の存在を忘れてはならないことは当然だが、米国同様、現在のカナダは多数の移民によって成り立っている。この移民国家カナダの民族構成は当り前のことながら多種多様である。

それを敢えて端的に表現すると、全人口のおよそ50パーセント弱がイギリス系——すなわちイングランド系、スコットランド系、ウェールズ系——、約25パーセントがフランス系、残りの25パーセントがヨーロッパ系あるいはアジア系等の各少数民族の総和ということになる。

少数民族中でも割合にパーセンテージが高いのはドイツ系、イタリア系、ウクライナ系、オランダ系等である。それにポーランド系、ロシア系、ハンガリー系、スカンディナヴィア系等が続く。アジア系はまだマイノリティ中のマイノリティである。

そのなかでは中国系が数的にも諸活動の点からも目立つ存在だが、現今では彼らに加えインド系、パキスタン系、ベトナム系、韓国系なども数を増している。南アメリカ、中東、アフリカの諸国からの移民も少なくない。

そして5万人弱の日系…というように、それこそカナダは世界の民族の標本箱のような観を呈している。

戦前においては、イギリス系が政治的・経済的・社会的に圧倒的優勢を誇っており、僅かにケベック州でフランス系が優位に立っていた程度で、他民族の影は誠に薄かった。

移民国家においては、“First come, First

serve.”，“先んずすなわち人を制す」であり、「数は力なり」である。この鉄則から言っても現在でもイギリス系、フランス系があらゆる面で優位に立っていることは否めない。何しろ言語一つを取り上げてみても、国語（公用語）は英語とフランス語なのである。

この基本的状況下ではあるけれども、しかし現今ではカナダは“Multi-culturism”（多様性文化主義）を標榜し、強くそれを推進している。このイズムは、少数民族の文化を多数民族の文化空間のなかへ吸収合併してしまうのではなく、それぞれの文化を重んじ発展させながら、その上に全体として調和のあるカナダ文化を醸成していこうというものである。

その点、諸民族のもつ各々固有の文化体系をそのまま維持させることはせず、それらを溶け合わせて一つの文化空間を湧出させようという“Melting-pot”（人種の坩堝）をもって任ずるアメリカとは好対称をなしている。

ちなみに1920年代以降、アメリカ社会について好んで用いられるようになった、この“Meltingpot”の語には二義がある。その1は、各国からの移民が新世界でmeltされ、新たに「アメリカ民族」、「アメリカ人」が創出されていく、という意味、その2は先に述べたように、移民してきた各民族の文化を渾然融合させ、新たな文化空間＝「アメリカ文化」空間を現出させる、という意味である。

ところが皮肉なことには、日系人に関してみると、meltを奉ずるアメリカにおいては、

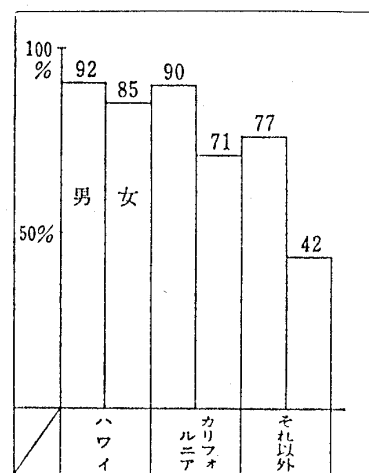


表1 アメリカ合衆国各地における日系人同士の結婚の割合

（鶴木誠『日系アメリカ人』（1976年、講談社）から引用。）

まだ日系人同士の結婚が多く、各民族の独自性を重視するカナダにおいて、他民族との通婚がすすみ、3世では80パーセント以上が他民族の異性と結婚するに至っている。そしてカナダ日系社会においては、このままでいくと近い将来、カナダにおける日本の文化は消滅の危機に瀕するのではないかということが真剣に取り沙汰されている。

確かに、トロントやバンクーバーにおいてチャイナ・タウンが殷賑を極め、中国系文化が咲を誇っているのに比するとき、日系社会の状況は「地域的まとまり」を欠き、さらには「文化的まとまり」を欠いていると言わざるを得ない。スティブストンとともに日系カナダ人にと

まさに日本人街の風情を呈していたパウエル・ストリートも現在では白人系や中国系に蚕食され、特徴の薄い町並みになってしまっている。(図2, 3 参照。)

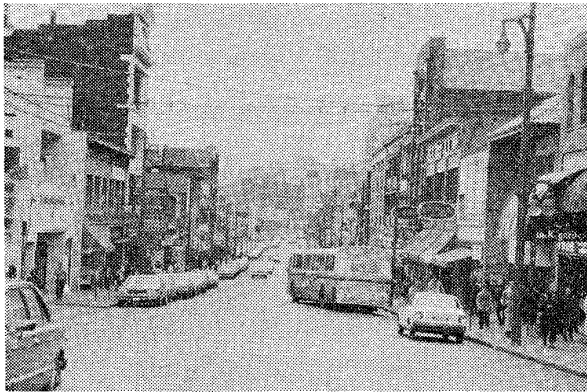


写真1 北米第2の規模を誇るバンクーバーのチャイナ・タウン〔1979年11月撮影〕

って心の原郷とも言うべきバンクーバー市のパウエル・ストリートにも、かつてリトル・トーキョーと称され日系の商店・会社・住宅から銭湯・下宿屋等々までが林立していた戦前の賑わいは最早やない。



写真2 1941年の Powell Street, Vancouver.

〔ブリティッシュ・コロンビア大学文書館所蔵の写真を筆者が複写したもの。〕

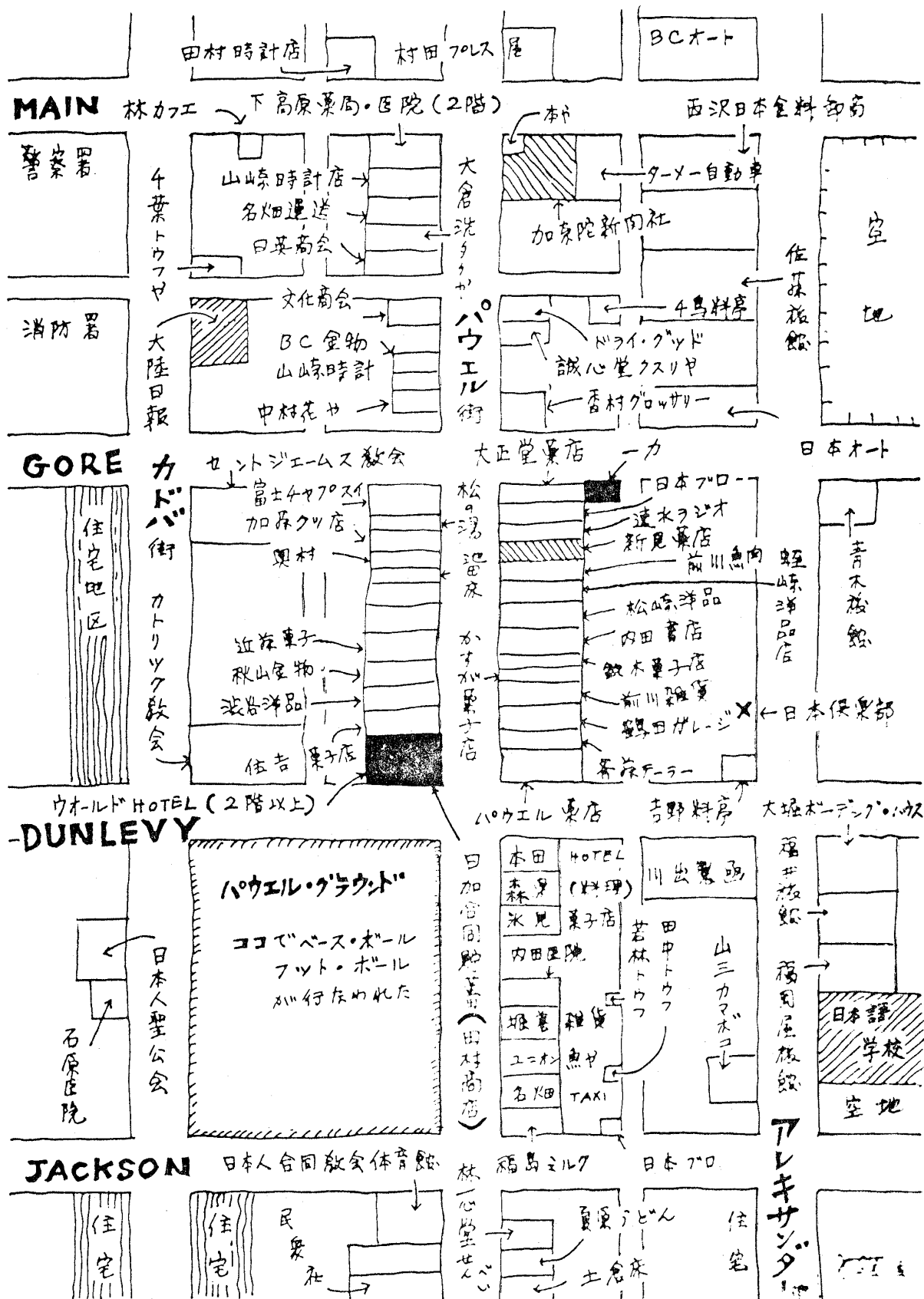


図2 戦前の Vancouver 日本人街

〔伊藤一男著『北米百年桜』（1969年、日貿出版社）から引用。〕

**E. HASTINGS ST.**

LIBRARY

The Royal Bank of CANADA

S H O P S (C)

First United Church

MANEKI Restaurant (J)

S H O P S (C)

**E. CORDOVA ST.**

Fishermen's Market

Toronto Dominion Bank

Bank of Montreal

S H O P S (C)

POST OFFICE

VANCOUVER PUBLIC SAFETY BUILDING

BC 空手協会

ARTISTS' LABORATORY

**GORE Ave.**

SALVATION ARMY TEMPLE

PRIVATE HOUSES

清水商店 (J)

S H O P S (C)

St. James Church

PRIVATE HOUSES

St. Paul's Church

Catholic Church

Franciscan Sisters of the Atonement

**DUNLEVY**

OFFICES & SHOPS

PRIVATE HOUSES

Government House (日本大使館)

賃貸月額 \$1.65

**JACKSON**

OFFICES & SHOPS

PRIVATE HOUSES

JAPANESE COMMUNITY VOLUNTEER'S ASSOCIATION (ボランティア)

日本大使館

Smile's Rooms

**POWELL ST.**

United Rooms (C)

Gastown LODGE

VANCOUVER FIRE DEPARTMENT FIREHOUSE NO. 2

UNDER CONSTRUCTION

MAX'S SECONDHAND STORE (W)

林田商会

OHIO ROOMS

MIRAGE CENTER

YORK ROOMS

VIDEO INN

百代電器有限公司

Western Equipment Ltd., Young Iron Works

Burfard Iron Works Ltd., Main Service Automotive Center Ltd.

**ALEXANDER ST.**

VACANT

Burfard Iron Works Ltd.

倉庫 物置場

VANCOUVER COLD STORAGE

**POWELL GROUND**

Oppenheimer Park

**POWELL ST.**

Harbour Grocery MAIN (C)

VANCOUVER FIRE DEPARTMENT FIREHOUSE NO. 2

UNDER CONSTRUCTION

MAX'S SECONDHAND STORE (W)

林田商会

OHIO ROOMS

MIRAGE CENTER

YORK ROOMS

VIDEO INN

百代電器有限公司

Western Equipment Ltd., Young Iron Works

Burfard Iron Works Ltd., Main Service Automotive Center Ltd.

**JACKSON**

OFFICES & SHOPS

PRIVATE HOUSES

JAPANESE COMMUNITY VOLUNTEER'S ASSOCIATION (ボランティア)

日本大使館

Smile's Rooms

**POWELL ST.**

Harbour Grocery MAIN (C)

VANCOUVER FIRE DEPARTMENT FIREHOUSE NO. 2

UNDER CONSTRUCTION

MAX'S SECONDHAND STORE (W)

林田商会

OHIO ROOMS

MIRAGE CENTER

YORK ROOMS

VIDEO INN

百代電器有限公司

Western Equipment Ltd., Young Iron Works

Burfard Iron Works Ltd., Main Service Automotive Center Ltd.

〔天沼作図 1979年11月 作成〕  
1983年1月 補正〕

— 6 —



写真3 現在のPowell Street, Vancouver.

〔1983年1月撮影〕

現在、カナダ全土を見渡してみても、日系人がかなりの規模で集住している地域というのは見当たらない。

その原因の一は、戦中・戦後を通じてカナダ政府が日系人を拡散させよう、一地域に多数の日系人が居住することを止めさせようとした政策をとったことにあったことは言うまでもない。そして日系人の側も集住していたがために、同化しようとしないう民族などとより一層の偏見を持たれ、差別が助長されたことに凝りて、戦後は自ら segregate することを自己規制したことも、その要因の一をなしていると言えよう。<sup>(5)</sup>

こうした「地域的まとまり」を欠くというハンディを負ってはいるものの、日系カナダ人は、日系文化、日本の文化の担い手としてMulti-cultureの一端を構成すべく地道な活動が続けている。このカナダの“Multi-culturalism”の政策のもと、各民族の伝統的文化は保護されながら、さらにそれに新しい要素を付け加え発展している。この高度な多様性の樽のなかで、無理なく「カナダ人」を醸し出していこう、カナダへのアイデンティティを醸し出していこうとしているのである。

ちなみにこの国の生活水準は高い。税金も高いけれども、失業保険、老人年金等、各種の社会保険は完備している。福祉・教育・少数民族のケアなどの為の予算の全予算中に占めるパーセンテージも低くない。

産業は鉄工業・農林漁業等が盛んである。鉄・ウラン・ニッケル・原油などの埋蔵量

は世界有数である。重水炉“CANDU”を独力で開発するなど世界的水準をはるかに抜く原子力工業をはじめとして工業水準も高い。マニトバ州、サスカチュワン州といった平原州における農業は、世界の穀倉地帯の一の名に恥じない規模の大きさと耕地の荘麗さを誇っている。広大な森林に恵れて製材業・パルプ業も非常に盛んなことは言うまでもない。太平洋岸の漁業に関して、日系人がその発展に多大な貢献をしていることもまた言うまでもないことである。

輸出は第1次産品が多く、逆に輸入は第2次産品が多い。つまりカナダは木材・原油・鉄鉱石・穀物等を輸出して、工業製品・生活必需品等を輸入する、「売り食い」,「買い食い」のできる優雅な国なのである。

しかし経済的にはまだアメリカ合衆国の影響下に置かれている。文化の諸方面についても同国のカナダへの影響力は強い。だが、あらゆる方面で、そうした状況から脱皮するための努力が意識的に重ねられている。こうしたなかで政治的にはもはや隣りの大国の影響力を相当に減殺させている。カナダは「中級国家」の理想を掲げ、大国にならないこと、核兵器を保有しないことを明言し、外交的にもリベラルな独自の路線を貫いているのである。

政党、ケベック問題その他については記述を省略して先を急ぐ。

### 3. もう一つの太平洋戦争へ

一つの国家の「国民」として、国家の利害のために戦争に刈り出されたり、あるいは直接、刈り出されはしないまでも戦争に何らかの形でコミットさせられることは、一個一個の人間にとって明らかに最大の悲劇の一である。

なぜなら、このことはその一個の人間が国家意志決定機関の枢要の地位を占める人物か、ないしは職業軍人でもない限り、その人間は自らの個人意志とは何らかかわりなく、直接・間接に人殺しに自動的に参画させられることを意味するからである。また逆にやはり自分の意志とはかかわりなしに否応なく死の淵に立たされることを意味するからである。

日本近代における日本「国民」は常にこの悲劇の主人公にさせられてきた。だが、日本人および日本人の血を引く人々のなかには、それ以上の悲劇の主人公を演じさせられた人々もあったのである。

\* \* \*

幕末維新の大激動期を経てようやく近代に突入した日本を待ち受けていたのは、アジア諸国を虎視眈眈とねらう欧米諸列強の圧倒的な経済力と軍事力とであった。その時点で日本には2つの選択肢があった。

その1は、アジア諸国と互惠平等の原則のもとに連帯して欧米諸列強の傍若無人な振舞いに抵抗し、アジア地域への侵略に歯止めをかけることであった。

その2は、欧米諸列強に対して屈辱的・従属的な関係に甘んじながら、その後塵を拝しながら日本自らもまたアジア地域への蚕食の手を伸ばしていく、という方途であった。

果たして日本は、富国強兵・殖産興業のローガンのもと、後者の道をひた走りに走り始める。遂に倒幕が達成された直後、1869年（明治2）初頭には早くも木戸孝允、岩倉具視らによって征韓が企てられ、1873年（明治6）には西郷隆盛を主唱者として、西郷とは異なった視点からではあったが板垣退助らもそれに賛同した所謂「征韓論」が唱えられていた。

その翌74年4月には、西郷らの「征韓論」をつぶした大久保利通らによって実質的には近代日本最初の海外侵略と言うべき台湾「征討」が強行されている。

その後、日本は1875年（明治8）9月には江華島事件を起こして、それを契機として翌76年、朝鮮に対して不平等きわまりない日鮮修好条規を押しつける。「朝鮮ハ自主ノ邦ニシテ」云々などという一見、彼の国の主権を尊重しているかに見える文章も、実は朝鮮の宗主国をもって任ずる清国に対する当てつけとデモンストレーションに過ぎなかった。

この条規はまさにかつて日本自身が欧米諸列強によって押しつけられた不平等条約の複製であった。この一件は、近代日本が国家の意志と

して「その2」の道を歩むことを明確にした象徴的な事件といえよう。

その間にも日本は1870年代から80年代初頭にかけて「琉球処分」を行ない、古い伝統をもつ独立国家・琉球を成し崩し的に日本領に組み入れてしまっている。

そして1894年（明治27）7月、日本は念願の法権を回復、イギリスをはじめ各国と改正通商航海条約の調印を済ませた直後、清国に対して宣戦を布告した。「強きに入るために弱きを挫く」日本の態度は露骨であった。

日清戦争の勝利によって、植民地を獲得し、国内の産業の基盤も固まり、金本位制を確立させた日本は、いよいよ帝国主義諸列強の仲間入りを果たすべくアジアの異端児になっていく。

1900年（明治33）には義和団事件に際して北京に兵を送り込み、1902年には第1次の日英同盟を締結、そして遂に1904年（明治37）2月には列強の一であるロシアに宣戦を布告するに至った。

日露戦争が一応、日本側の勝利のような格好で決着をみたのをよいことに、日本はその後、一層、露骨に満洲や朝鮮に食指を動かしていく。とうとう1910年（明治43）には韓国を併合という形で植民地化してしまった。

国内的には「大正デモクラシー」が一定限の彩を添え、明治以降にあって数少ないリベラルな雰囲気<sup>(6)</sup>が社会に漂った時期の一つ——私が提唱する「大正市民主義期」の期間——にあって、対外的には膨張主義の路線は基本的に何ら換わるものではなかったのである。

1914年（大正3）8月には「欧州大戦」以外の何ものでもないはずの第1次世界大戦に、日英同盟を口実に便乗参戦し、ドイツ領南洋諸島や膠州湾等を占領する。さらにはそのどさくさに紛れて中華民国に対し21カ条の理不尽な要求を飲ませている。

1918年（大正7）には、「シベリア出兵」という名の戦争を起こし、その後も沿海州や山東半島などへの「出兵」を繰り返していく。1920年代、世界的な厭戦ムードのなかで、日本も派



手な動きは控えながらも、同年代終半には済南事件、張作霖爆死事件（日本軍部言うところの満洲某重大事件）等で帝国主義的野望の馬脚を露わしてしまっていた。

そしていよいよ1931年（昭和6）9月、「満洲事変」という名の侵略戦争を起こした日本は長い長い戦争の時代に突入していった。十五年戦争の開始である。この戦争は1945年（昭和20）8月15日、日本の降伏によって終りを告げるまで延々と続きに続いたのであった。

このようにみえてくると、1868年（明治1）から1945年（昭和20）までの日本近代の歩みというのは、まさに殖産興業・富国強兵そして脱亜入欧のためのアジア諸国への侵略、それに伴っての帝国主義諸列強との利害の対立、それに伴っての戦争の連続だったことがはっきりするのである。

\*       \*       \*

このような日本近代の歩みのなかで、幾多の日本「国民」が自らの個人意志とはかかわりなく、強制力を保有する国家意志によって大量の人殺しに加担させられ、また逆に自らも殺される可能性の大きい状況に追い込まれていった。ここでは日本「国民」は明らかに外に向けては加害者であり、内においては被害者であった。また外から被害を受けるという点でも被害者であった。

こうして二重の意味で被害者でありながら加害者でもあった近代の日本人は喜劇的悲劇の主人公だった。「毒を盛るピエロ」であった。

ところが日本人および日本人の血を受け継ぐ人々のなかには、「毒を盛るピエロ」にすらなれなかった人々もいた。彼ら、それは、ある人の場合ほとんど「国家意志」によって、ある人の場合自らの住む小地域の意志（私の言うところの「<sup>(7)</sup>共同体意志」）によって、ある人の場合自らの「個人意志」によって、アメリカ合衆国あるいはカナダへ移民した人々である。

彼ら北米移民は、十五年戦争の最終ラウンド、太平洋戦争が始まった直後に、アメリカやカナダの西海岸地域——つまり彼らがやっとの思いでそれなりの地盤を築き上げていた地域——か

ら内陸部の不毛の地へ強制的に移動させられてしまった。その財産のほとんどは安く買いたたかれたり、掠め取られたり、没収されたり、という惨澹たる状況のもとで。

しかも強制的に移動させられ、強制収容された移民は、日本国籍を保有している1世だけではなかった。既にアメリカ市民権、カナダ市民権をもつ2世・3世も同断だったのである。

加うるに、アメリカやカナダにとって戦争相手国出身の移民という点においては日系移民と同様の立場にあるはずのドイツ系移民、イタリア系移民に対してはほぼ何らの処置もとられなかった。（もちろん極く僅かのファナティックなナチズムやファシズムの信奉者に対しては何らかの処置がとられたけれども。）

北米の日系2世や3世は、アメリカやカナダの「国民」として国家の利害のために戦争に刈り出されたり、直接、刈り出されるのではなくとも何らかの形でコミットさせられたりすること以上の悲劇を演じさせられたのである。

彼らは米軍442部隊その他数少ない例外を除けば、「毒を盛るピエロ」を演ずることすら許されず、前代未聞の屈辱的な史劇の主人公に祭り上げられたのであった。それは「人種偏見・差別」そして「戦争」のゆえに起きた悲劇だった。ここに日本から遙かに隔たった太平洋の彼方の北アメリカ大陸における「もう一つの太平洋戦争」のストーリーがある。<sup>(8)</sup>

ちょうど当時、留学生として滞米中で自らも被収容体験をもつ村田聖明は、アメリカ政府・米軍が日本人・日系人を収容したことは当然と肯定し、さらに「同じ敵国のドイツ人やイタリア人が収容されなかったのは、日本人に対する人種的偏見の証拠だ」という論議は、的外れも甚しい。太平洋の西からくる脅威は、独伊ではなく、日本だったのだ<sup>(9)</sup>とする。

が、この論こそ的外れであろう。「太平洋の西からくる脅威」は確かに日本だったかもしれないが、万が一、日本軍が北米海岸地域に上陸したとしたら、日本軍に味方するかもしれない云々という理由で、日本人・日系アメリカ人を収容しなければならなかったとするならば、日

独伊三国軍事同盟で結ばれていた国出身の人々、ドイツ人・ドイツ系アメリカ人、イタリア人・イタリア系アメリカ人も同様の理由で収容しなければならなかったであろう。しかも「大西洋の東からくる（かもしれない）脅威」はドイツやイタリアだったのである。この論議の際には、ドイツ系移民・イタリア系移民と日系移民との数の多寡を云々することも、問題を本質から遠ざけることになる。

ドイツ系・イタリア系と日系との間の扱いに明瞭な差があったことをアメリカの戦略上の問題などと矮少化して片付けてしまうべきでないことは言うまでもあるまい。私は、村田に反論して「…強制収容問題の根底には、アジア系北米移民開始以来の長い人種偏見・差別、そして排斥の歴史が横たわっているのである<sup>(10)</sup>」と述べた。

つまりこの「もう一つの太平洋戦争」たる日本人・日系人のアメリカやカナダにおける「強制収容」問題は、その時期だけに局限して考察を加えても事の本質に迫ることは出来ないのである。「強制収容」は、日系移民のみならずアジア系移民に対する積もり積もった偏見・差別・排斥の歴史の集大成、最後の総仕上げだったと言っても過言ではないだろう。

そこで私は、もう一度、日本人北米移民の歴史を最初から見直してみたいと考えたのである。そして北米移民のなかでも彼我において比較的数多くの研究成果が公刊されているアメリカの日本人移民・日系人の歴史ではなく、まだ研究成果も数少ないカナダの日本人移民・日系人の歴史<sup>(12)</sup>を辿ってみようと思う。

#### 4. 日本人に告ぐ

ORDERS FROM THE B.C.  
SECURITY COMMISSION  
Notice to Vancouver Japanese

Persons of Japanese origin residing in Vancouver should terminate, not later than the 30th April, 1942, all leases or rental arrangements they may

be working under. They must also be prepared to move either to Hastings Park or to work camps or to places under the Interior Housing Scheme at twenty-four hours notice. No determinations whatsoever on business grounds may be made to the above orders.

晩市内の日本人に告ぐ

廿四時間の予告で移動出来る用意せよ

晩香坡市内に居住する日本人にして總てのリース又は家屋レントの取極めをしてゐる者は四月三十日までに之を解除すべきである。而してヘステングス・パーク若しくは労働キャンプ乃至は奥地住居計畫地へ二十四時間の予告のもとに移動出来る用意をして置くべきである。右の移動命令はビジネス上で如何なる理由があらうとも猶豫はしないのである。

ビーシー・セキュリティー・コミッション<sup>(13)</sup>

こんな高飛車な日英両語の文章が、バンクーバー在住の日本人・日系人に対して発されたのは、1942年4月29日のことであつた。発令者はBCSC (B. C. Security Commission——ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会) である。

「晩香坡市内に居住する日本人」と言えば、日本国籍を有する者で偶々、当時バンクーバーに住んでいる人というように解釈するのが妥当であろう。だが、この命令に依る「日本人」の範疇は単に日本国籍を有する者だけではなかった。

それは英文の方を見れば一目瞭然である。‘Persons of Japanese origin residing in Vancouver.’ 要するに日本人だけでなく、「日本人を祖先とする人々」はもはやカナダ市民であつても、日本国籍を有する日本人と同一視され、敵性国人の範疇に入れられ、強制移動の

対象とされたのであった。

長い間に渡る「人種偏見・差別」の狂気に「戦争」の狂気が加わって、平然とこうした命令が下されたのである。「Yellow Peril」つまり「黄禍」の論は、ドイツ帝国のヴィルヘルム (Wilhelm) 2 世によって唱えられたものが著名だが、ここカナダでも 19 世紀半ば以降、東洋系移民なканずく中国系移民の増加にともなうて、先住の白人系移民の彼らに対する反発は強まっており、黄禍論的論調は社会に蔓延していた。

白人系のなかでも、先発のイギリス系やフランス系等に比して、まだ移住地での地歩を確立していない後発のアイルランド系、イタリア系等の移民は、下層労働力として中国系移民と競合するために、よりストレートな憎悪の情を彼らに向けていた。このあたりの状況はアメリカ合衆国の事情と同様であった。

結局、彼ら後発白人系移民を中心とする白人たちのしつような中国系移民排斥運動は、1886 年 (明治 19) には、移民としてカナダに入国する中国人は人頭税を支払わなければならなくなる等の「成果」<sup>(14)</sup>を挙げていく。

その直前、1880 年 (明治 13) から 1884 年 (明治 17) までの間に、1 万 7 千人にもものぼる中国人が CPR (Canadian Pacific Railway——カナダ太平洋鉄道) の最終敷設区間の難工事に労働者として刈り出されていた。そして過労、飢え、凍傷、不慮の事故・災害等によって彼らの間には犠牲者が続出していた。ブリティッシュ・コロンビア州の CPR の線路の机木の一本一本はそうした中国人労働者の墓標といえよう。CPR の完成は、彼らの労働を抜きにしては到底、考えられなかった。にもかかわらず、同鉄道の完成 (1885 年 [明治 18]) の翌年には、上記のような排中国的な法案の成立をみるのである。

こうして、この前後から中国系移民は厳しく締め出されていく。代わって、彼らの労働力としての穴を埋めるような形で増加してきたのが、日本人カナダ移民であった。

日本からの移民は勤勉で従順だったので非常

に重宝がられたが、他方では中国系に代わって排斥の矢面に立たされていくことになった。かくして、苦難に満ちた日本人カナダ移民の歴史の幕明けとなる。

## 5. 黎明のころ——Japanese Pioneers——

### (a) 永野萬蔵

1977 年、カナダ各地では「カナダ日系移民百年祭」が賑やかに催された。その年が日本からカナダへの移民が始まって百年目、百周年の年だったからである。

日本人として初めてのカナダ移民というモニュメンタルな名を保持しているのは、長崎県口之津出身の永野萬蔵である。日本人カナダ移民史の劈頭を飾る彼の生涯はパイオニアにふさわしく波乱に富んでいる。

この萬蔵の出身地、口之津の港はかつて清く貧しくうら若い乙女たちが遠い異国で春をひさぐ運命を背負って出航を待った港でもある。

鎖国の間も外国との窓口の役割を果たし続けてきた長崎にも近く、近代以降は石炭積出その他の港として中国等との交流も盛んになった同地の人々は、良きにつけ悪きにつけ海外との行き来をごく身近なものと感じていた。

萬蔵はこの地で 1855 年 (安政 2) に生を享けた。網屋の 4 男である。6 人きょうだいの 4 番目であるから家を継げる可能性は限りなくゼロに近い。そんなことも手伝って彼はこの地の多くの次男以下の男子同様、海外への出稼ぎに強くひかれていった。

萬蔵が何歳の時に故郷を離れ、いくつの時、カナダに上陸したかについては諸説紛々としていて定説はない。しかし、船上での労働や船大工のような仕事をしているうちに北米への渡航を思い立ち、イギリス籍の船に乗り込み、1877 年 (明治 10) 5 月頃、カナダのニューウエストミンスターに至って船を離れ、この地を基盤として一旗挙げるべく上陸した、ということだけははっきりしている。

そこで 1877 年が日本からのカナダ移民始まりの年ということになる。1868 年 (明治 1)，約 150 名の所謂「元年者」たちがサイオート号でハ

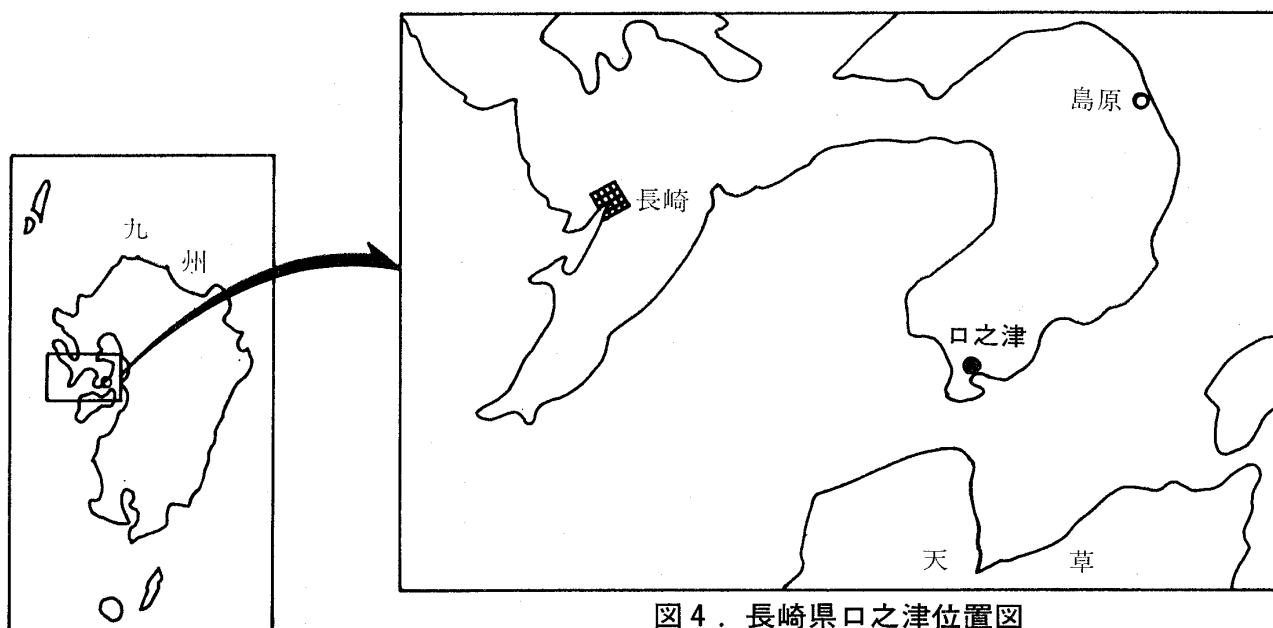


図4．長崎県口之津位置図

ワイに移民して、近代日本における移住の歴史が切って落とされてから9年後のことであった。

この当時、ブリティッシュ・コロンビア（以下、BCと略称することもある）は、1871年（明治4）にカナダに合併されていた。このイギリスの植民地BCは、危うくアメリカ合衆国に編入されるところだったが、鉄道でカナダ東部と直結させることをカナダ領政府が約束したので、カナダに参入したのであった。かくして先述のように1885年（明治18）、CPRがバンクーバーまで開通していた。

そんな頃、密入国に易々と成功した萬蔵のその後はどうなっただろうか。上陸後、さほど時の経過をみないうちに彼は鮭漁に従事することができるようになっていた。持前の押しの強さと人好きのする性格の故であろう。投宿していたホテルの主に見込まれ、イタリア人の相棒を紹介され、スプリング・サーモン漁を請負うことになったのである。

その後、萬蔵はニューウエストミンスターからガス・タウン（後のバンクーバー）へ移り、港湾労働に従事したり、入国制限が厳しくなった中国人の労働者を上海や香港から連れてくる仕事などに手を染めた。

しかし何れの場合にも、彼が黄色人種であるがゆえに、白人たちにうまい汁を吸い取られてしまい、自分の手元には大した金は残らず仕舞いだった。と、なると自営しかない、ということで彼は一時カナダを離れ、国境を越えてアメリカに入り、シアトルに定着する。ここで彼は煙草屋、続いてレストランを経営する。

これが当たって約2年で相当の資金が蓄積できたので萬蔵はカナダに舞い戻り、バンクーバー島のビクトリアに居を定める。同地で、日本を始め東洋の美術工芸品を売る店やホテルの経営に着手する。若干の余裕をみるようになってから彼は日本にも投資を始め、横浜でレストランを経営したりしている。が、時期尚早だったせいか、日本での彼の事業は失敗に帰している。

その後、萬蔵は「鮭」に回帰し、塩鮭を製造し、日本へ輸出する事業を興す。その事業は1883年（明治26）から1922年（大正11）まで営々と続けられた。この大成功によって彼はカナダの日系社会において、はたまた彼の郷里口之津において「カナダ大尽」、「サーモン大尽」の名をほしままにするに至ったのであった。

しかし好事魔多し。晩年に及んで萬蔵の事業はすべて落ち目となり、しかも病魔に犯され、さらには火災に遭って自宅も店も財産も灰塵に

帰するという幾重もの不幸に見舞われる。その失意のうちに望郷の念止みがたくなった彼は1922年、帰国を決意する。

日本人カナダ移民の先駆者、永野萬蔵が郷里口之津でその生涯を終えたのは1924年（大正13）5月のことであつた。<sup>(15)</sup>

奇しくも彼の死の直前、アメリカ合衆国では排日移民法案が上・下両院を通過、公布、施行されようとしていた。北米での彼ら日本人移民

和歌山県日高郡美浜町三尾，というよりは「アメリカ村」と言った方がずっと通りのよい旧三尾村で今も村人たちが敬慕の念をもって語るのがこの人，工野儀兵衛である。

三尾はさすがに「アメリカ村」という愛称を有するだけに，公的な建物にはちゃんと日本語とともに英語で表示がしてある。たとえば三尾郵便局には，「三尾郵便局」という日本語のプ

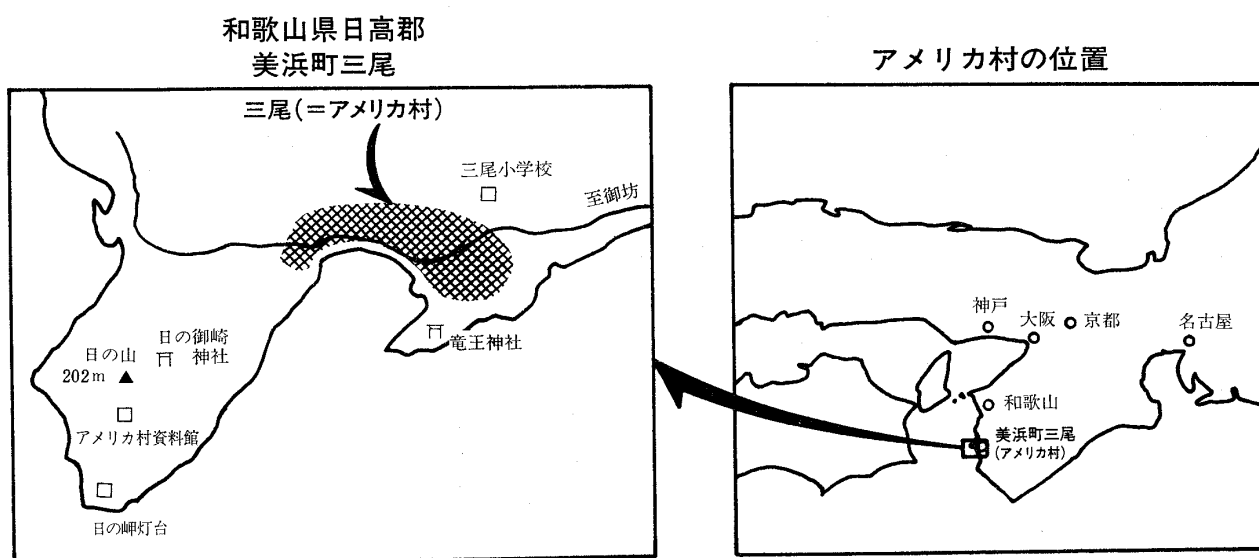


図5．アメリカ村位置図

のパイオニアたちの厳しい生涯の闘いは一体、何だったのだろうか。

(b) 工野儀兵衛

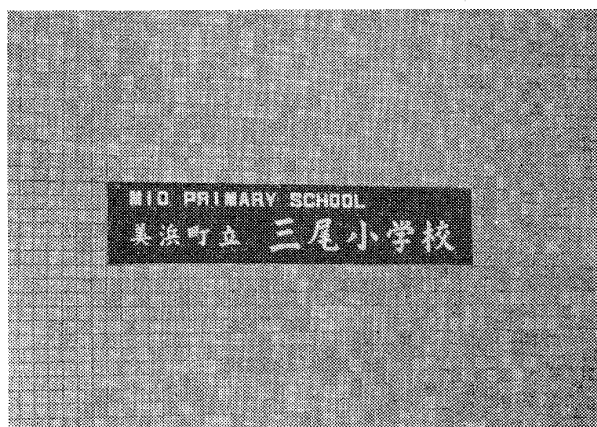


写真4 三尾小学校  
〔1978年3月撮影〕

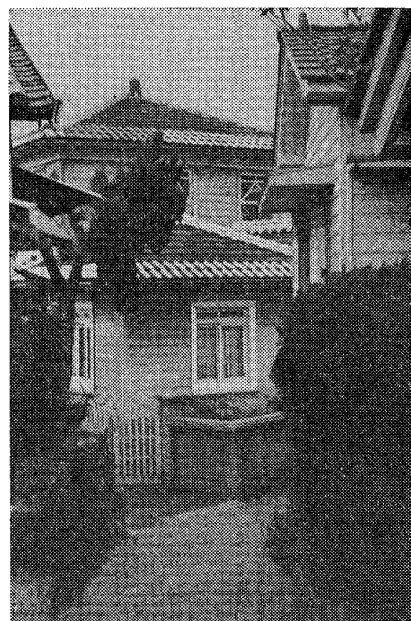


写真5 三尾の随所に見られる西洋式の家屋  
〔1978年3月撮影〕

レートの上に“MIO POST OFFICE”という英語のプレートが掲げられている。三尾小学校も〔写真4〕の通りである。このあたりには移民先進地としての三尾の人々の心意気、自負心が大いに感じられる。この地の人々の日常会話にも実際、英語がポンポンと飛び出してくるのである。

余談はさておき、旧村内には工野儀兵衛の像が建立されており〔写真7〕、顕彰碑もある。日の岬にあるアメリカ村資料館にも儀兵衛

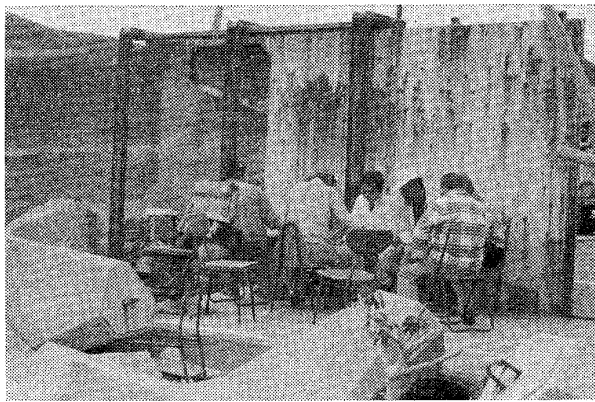


写真6 三尾の片隅の風景，村人たちの服装も会話もどことなくバタクさい。

〔1977年3月撮影〕



写真7 三尾小学校校庭に建つ工野儀兵衛の像。

〔1977年3月撮影〕

にまつわる資料が数多く展示されている。これらは、この地における彼の果たした役割の大きさを知って余りある事実といえよう。

碑に曰く、

工野儀兵衛翁ハ三尾村ノ先覚者ニシテ海外発展ノ大先輩ナリ明治二十年翁年三十四歳始メテ晩香坡ニ渡ルヤ単身赤手辛苦備ニ至ルモ僅ニ曙光ヲ認ムルヤ頻ニ近親鄰保ヲ招キ己ヲ忘レテ指導誘掖ニ努メ保護奨励懇切ヲ極ム翁在米二十五年遂ニ自ラ産ヲ成スニ到ラズト雖モ後進ノ翁ニ依リテ志ヲ達セル者其数ヲ知ラズ今ヤ三尾ノ村民過半ハ彼地ニ居リ民戸ノ殷富近郷ニ比ナシ（以下省略）

昭和六年八月十二日

...

1854年（安政1），三尾に生まれた工野儀兵衛は、永野萬蔵に遅れること10年、1887年（明治20）にカナダへやってきた。彼が大河フレーザー川の河口に立った時が、後に殷賑を極める三尾の移民史の曙である。

儀兵衛が河口を見つめていると、夥しい数の鮭が川を遡っていき尽きることがない。これは仕事になる、と直観した彼は早速、郷里の人々にその旨を連絡、知人縁者をカナダへ呼び寄せた。そこで彼の誘いに乗って村人たちが次から次へと三尾からフレーザー河口めざしてやってきた。

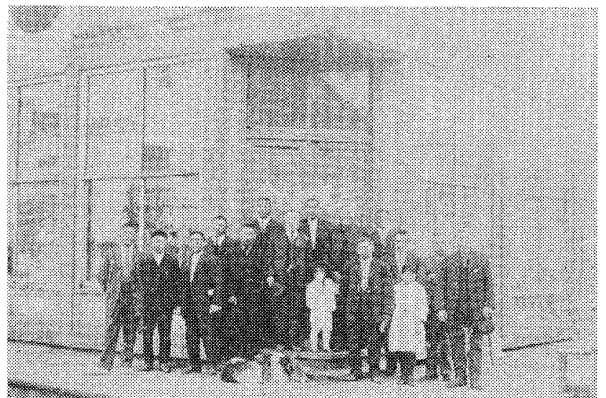


写真8 ステプストンで結成された三尾村人会

〔写真2に同じ。BC大学所蔵〕



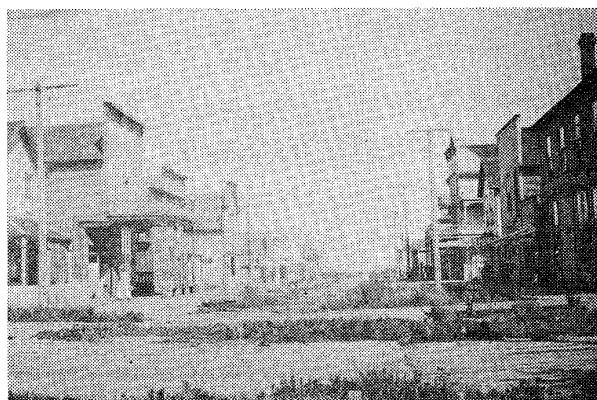


写真9 往時の Steveston (年代不詳)

〔リッチモンド市役所壁面に掲げられている写  
真を筆者が複製したもの。1979年10月撮影。〕

この伝説的な話は、三尾では神話のごとく大切に語り継がれている。実際、こうして儀兵衛の勧めによってカナダへ渡ってきた人々の多くが、同川河口の地、ステブストンに住みつき、漁業ないしは漁業関連産業に就労し、カナダ漁業の発展に少なからざる寄与をしていた。

現在、母村たる三尾の人口は僅か 950 名なのに対し、カナダ在住の同地出身の日系人の数は何と 4,500 名に上っている。しかも母村在の 950 名中 200 名は移民経験者<sup>(16)</sup>なのである。

この「挙村」移民といっても言い過ぎではないような状況の端緒を生み出したのは、まさに工野儀兵衛であった。大工から一念発起、勇躍カナダの地に渡った彼だったが、しかし個人的には決して恵まれることなく、不遇のうちに 1917 年（大正 6）、56 歳でこの世を去った。

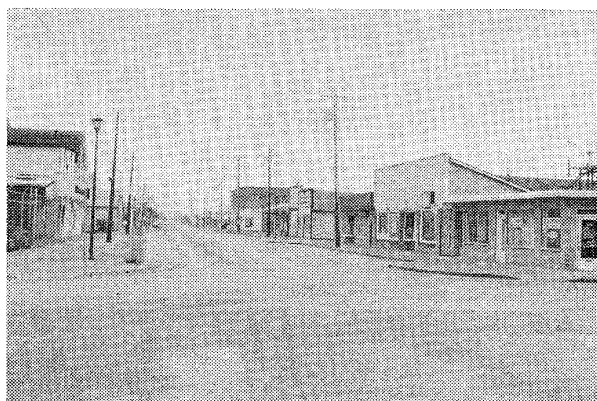


写真10 現在の Steveston

〔1982年12月撮影〕

### （c） 本間留吉と池田有親

本間と池田、この 2 人はカナダにおいてそれぞれ全く異った活動をおこなった人物である。が、面白いところで一つ、両者には共通点がある。それは 2 人とも文字通り、カナダに名を残している、という点である。

すなわち本間は、「トミー・ホンマ・ハイスクール」として学校の名に、そして池田は「イケダ・ベイ」として湾の名に、その名を残しているのだ。

まず本間のことから話を始めよう。千葉県出身の本間は、工野儀兵衛と同年、1887 年（明治 20）にカナダに渡っている。そして儀兵衛同様、フレーザー河口のステブストンに住み、漁業に携り始めた。



写真11 現在の Fraser 河口, Steveston 漁港。

〔1983年1月撮影〕

この頃から、先に触れたように儀兵衛の誘いかけ等によって、ステブストンにおける日本人移民の人口は年々、着実に増加していた。1900 年（明治 33）には、フレーザー河口周辺の日系人口は 3,419 名に達していた。

しかも手先が器用で、道具の改良・船の操り方・魚の捕獲の仕方などにも抜群の力量を示す日本人のこととて、この地における漁業および漁業に関連する仕事においても、その小器用さを遺憾なく発揮していた。したがって漁獲量にしても、白人系やカナダ・インディアン（つまりネイティブ・カナディアン）系の漁師たちの遠く及ぶところではなかった。

そうなってくると、ただでさえ人種偏見・差別の意識を強く持っている白人たちとの間に衝

突が起こるのは時間の問題である。そんな折り、「已にユニオンを作って、ユニオンの力によって一切を解決して居た白人の団体より、全漁者の問題を解決するのには、日本人を加入せしめなくてはならぬと云ふ考へから彼等の組合に加入を勧誘して来たのであった。<sup>(17)</sup>」けれども日本人側はその申し出を拒否、独自に「フレザー河日本人漁者団体」(1897年〔明治30〕、設立当初は「フレザー河漁師団体」と称していた)を結成した。

この在カナダ日本人初の団体らしい団体は、“The Japanese Fishermen’s Benevolent Society (of Fraser River)”として、1900年(明治33)6月に、BC州政府から団体登記認可を受けている。

この団体の初代総理として活躍したのが本間留吉だった。彼はまとめ役として日本人相互の和親に努める一方、漁船や船具の改良等にも力を尽くす。が、彼の真の活躍は次の段階に始まる。

本間はステブストンでの活躍の後、時を経ずしてバンクーバーへ移り、「一二三樓」と称する料亭を開いたり、ホテルを経営したりし始める。このように本間は自ら各種の事業を興すとともに、「日本人協和会を起して其会長となり加奈陀在留者の殆ど大半を網羅して一致の行動に出で、以て白人勢力の圧迫に備ふる所あり、嘗て選挙権獲得問題の勃発するや、自ら試訴人の地位に立ち、寝食を廃して利権の擁護に尽瘁したり<sup>(18)</sup>」し始める。

この選挙権獲得運動に関しては、後にやや詳しく述べるのでここではこれ以上は触れないが、同運動の先頭に立って活動したのが本間だった。彼の必死の運動は法廷闘争にまで持ち込まれたが、結局、最終的には敗北に帰してしまっ

た。が、しかし本間のこの努力が日本人移民の権利意識の覚醒に寄与したことは言うまでもない。そして長期間に渡って日系人を差別し続けてきた白人の側にも現代に至って遂にこの先覚的な一人の黄色人種の男の闘いを正当に評価しようという動きがでてきた。

その一つの結論が、1977年における、リッチモンド市(バンクーバーに南接する都市、同市の西南端にステブストンがある)に新設されるハイスクールに本間の名を冠するという同市学務委員会の決定であった。

彼自身はそれに先立つこと30数年、BC州奥地のキャンプでひっそりとその生を終えている。

さてこの辺で、もう一人、カナダに名を残す池田有親に話を移そう。彼は1864年(元治1)、新潟の生まれである。1890年(明治23)にアメリカ合衆国に渡り、カリフォルニアで農業に従事していた。

その後、ゴールド・ラッシュに湧きかえるアラスカへ一獲千金をねらって渡航したりした後、池田はカナダに定着する。そのカナダで、そもそもは漁場開拓を主目的として探検に出掛けたクイーン・シャーロット島で彼は有望な鉱脈を発見した。

早速、池田は鉱業へと転進、本腰を入れ始める。1919年(大正8)、国内外で大いに資本金を募ってカナダ興業株式会社を興し、銅の採掘に力を入れたが、これは成功せず翌1920年には閉山を余儀なくされてしまった。が、冒険精神と企業家精神に富んだ彼は、それにもめげず同じ頃、クイーン・シャーロット諸島中の一小島・モレスビー島を探検、同島のある湾でかなり有望と思われる銅鉱山を発見している。この功績によって、その湾は「イケダ・ベイ」と命名されたのであった。

池田の果たした役割は、カナダ鉱業発展のパイオニアの一人としてかなり重要な意味を持っているが、今もカナダ太平洋岸北方に位置する一小島の一小湾にその名を残すのみである。カナダ日系人の間でこそ、池田は知る人ぞ知る人物となっている。しかし、カナダ史全体のなかでは完全に無視し去られているのは、彼の地において戦後、日系人の社会的ステイタスが向上の一途を辿っているとはいえ、日系カナダ人、ひいてはアジア系カナダ人全体に対する人種偏見・差別がまだまだ根強く存在していることの



一証左といえよう。

池田は、このようにカナダにおける鉱業の発展に大いなる足跡を残しながら、自らの事業にはほとんど失敗し、1939年（昭和14）、不遇のうちにバンクーバーで冒険の生涯を閉じた。75年苦闘の連続の生涯であった。

本間留吉の方は、太平洋戦争開始の後、多くの仲間ともどもスローカンの収容所へ送り込まれている。1944年（昭和19）、彼は選挙権が与えられる日を待つことなく、彼の地で寂しく客死して果てた。ブリティッシュ・コロンビア州において、日系人に当然のことながら待望の選挙権が付与されたのは、彼の死から数えて5年目、1949年（昭和24）のことであった。日加間の戦争が終了してからも4年の歳月の経過を待たなければならなかったのである。

#### （d） 及川甚三郎

アメリカ及甚こと及川甚三郎の名は、新田次郎の作品『密航船水安丸』によって一躍、知れ渡った。<sup>(19)</sup>

この新田によって生き返った及甚は、1854年（安政1）に仙台藩の片田舎（後、宮城県登米郡米川村、現在は東和町米川）で、小野寺家の3男として生まれた人物である。当然、家は継げそうもない。3男坊の宿命として、彼は養子に入り、及川姓を名乗る。そして及川家の家業たる製糸業を継ぐ。仕事の関係で彼は足繁く横浜へ赴くことになった。この横浜で及甚の海外雄飛の夢は大きくふくらみ、生来、夢を夢だけで終わらすのが不得意な彼はその実現に向けて突っ走り始める。

遂に及甚は密航を企てるに至った。何度かの失敗にもめげず、1896年（明治29）、ようやくカナダの大地に足を踏み入れることができた。そして多くの当時の日本人移民同様、彼もフレーザー河口で鮭漁に従事する。

まず海外雄飛という第一段階の夢を実現した彼は、河口で来る日も来る日も仕事に精を出しながら、いつしか新たな夢を描き始めていた。この河口に点在する島のうちの一つを我がものとし、そこへ故郷から人々を呼び寄せ、豊かに

農漁業を営めるユートピアを建設しよう、という夢である。

やがて及甚は、この第二段階の夢を現実のものとするべく、幾多の島のなかから見染めたライオン島を借用（後、買収）をした上で、1906年（明治39）に日本へ戻り、郷里および近隣の村々で同志を募った。集う者82名。（83名という説もある。また内、女性2人という説と3人とする説とがあるが、これもはっきりしない。何れにせよ、この程度の微差は大勢に影響あるまい。）

堂々の集団密航であった。この密航に使われたのが、及甚が横浜で仕入れた200トン余の小さな帆かけ船、水安丸だった。40日以上の日数を費して太平洋をのろのろと横断、カナダはバンクーバー島のビクトリアに入り込んだ。

もちろん密入国である。如何んせん80人以上の大世帯だ。一応、注意深く幾班かに分かれて行動を開始したものの、すぐに見付かり、簡単に全員、捕まってしまった。

が、及甚の沈着な機転と冷静な配慮と、バンクーバー日本領事館・書記生の吉江三郎らの尽力によって、一行は本国への強制送還を免れ、上陸を許される。それどころか正式の移民として遇されることになったのである。1907年（明治40）、バンクーバーに排日の大暴動が起これ、翌年、その一つの顕著な帰結として、日本側が自発的に移民を制限することにした取り決め

“gentlemen's agreement”，レミュー協定が締結されることになる直前のことであった。

既に排日の気運が大いに高まっていたこの時期に、80数人にも及ぶ密入国者が何故、いとも簡単に入国許可を得、さらに間を置かずして正式の移民と認められるに至ったのか。この間の事情はいまだ定かではない。

大量密入国というような問題となると個別的な排日云々というレベルの問題から、政府間レベルの問題となる。となるとカナダ自治領政府の意向が問題となる。この領政府の意向には、当然、宗主国イギリスの政府の意向が反映する。当時、そのイギリスと日本は既に日英同盟を結んでおり（第1次同盟は、1902年〔明治35

」に締結)、さらに日露戦争を機にそれは攻守同盟にまで拡大されていた(1905年〔明治38〕)。こうした情勢のもとでは、イギリスは当然、ある程度は日本に有利なように動くと考えられる。つまりイギリス政府はこの日本人のカナダへの大量密入国に関して、カナダ領政府に対して彼らに寛大な処置をとるように要請したのではないか、という推測が成り立つのである。

もちろん、その場合のイギリス政府の行動は日本政府の要請を受けてのものであろう。かくしてカナダ領政府は静かに数多くの日本人不法入国者を移民として迎え入れたのではないだろうか。国際関係の影響をもろに受ける個、移民の姿がここにある。

もちろん、そうした国家間の関係だけではなく、カナダ国内の事情も預っていたであろうことは想像に難くない。「日本人憎し」云々という白人たちの個人的感情、その集合としての「排日」という社会的風潮は別として、厳然たる経済的要請としてカナダはまだまだ労働力を必要としていたのである。

ともあれ、こうして及甚配下の80数人はカナダの人となり、彼らのうちの多くは鉄道関係、林業等へと就労してゆき、幾人かはライオン島に残ることになった。

彼はその後、同志たちとともに同島の経営をすすめていく。とともに事業家・及甚は日本における移民希望者のカナダへの移送にも携ったりしている。そうこうしているうちに、やがて1910年代初頭には同島の人口は70名を越えるに至ったのであった。

島はコンミューンのように成長し、野菜づくり、米づくり、塩鮭や筋子の輸出、醸造などがおこなわれた。生産は伸び、小さな曲折には度々、遭遇したものの、まずまず事は順調に進んでいった。白人社会ともつかず離れず、それなりの関係を維持し続けた。

だが、異郷の地で晩年を迎えた及甚からは、若い頃の猛々しいまでの我武者羅な行動力もそろそろ鳴りをひそめ始めていた。実子を亡くすなど不幸も重なり、彼はただ望郷の念に臥せる日々を迎えることになる。青壮年のころの彼か

らは考えられないことだった。結局、故郷への思いを押え切れず、1917年(大正6)、彼は帰国する。

けれども帰国した及甚にとって、郷里は最早や安住の地でも歓待を受ける地でもなかった。外に出ていく本人の意志・動機はどうあれ、内に残る人々にとって、やはり移民は「棄民」だったのか。家屋敷は人手に渡ってしまっていた。夢にまで見た故郷で彼は厄介者扱いにされてしまった。

もはや此処には居られないことを悟った及甚は、宮城県石巻近郊の地へ移る。衰えたりとは言え事業欲の燃え尽きていなかった彼はここで、沼の干拓という新しい事業に夢を託した。しかし彼の思惑通りには事は運ばなかった。

しかも及甚が去った後、ライオン島の諸事業も落ち目の一途を辿っていた。彼は内でも外でも行き詰まったことを知る。その軽くない失意のうちに、帰国後10年目の1927年(昭和2)4月、「アメリカ及甚」とうたわれた及川甚三郎はひっそりと息をひき取った。終焉の地は、移民の新天地でもなく、また故郷の村でもなかった。

#### (e) 田村新吉

現在に至るまで日系の人々にパウエル・グラウンドとして親しまれ、日がな一日、日系、白人系、カナダ・インディアン(つまりネイティブ・カナディアン)系の老人たち、そして鳩やカモメが集うオープンハイマー公園(図3、参



写真12 田村新吉の建築したビルディング(左端)  
〔1979年9月撮影〕

照)を東側に見降す位置に、少々古ぼけはしているものの、今も端然とした姿を残しているランドマーク的な建築物がある。

1913年(大正2)に落成したそのビルディングの元々の所有者、それが田村新吉だ。彼は1863年(文久3)の生まれ、熊本藩士の子である。1888年(明治21)に、それまで懸命に貯めた小銭を携えてカナダへやってきた。

そしてビクトリアやバンクーバーで紆余曲折を経た後、彼は1898年(明治31)——永野萬蔵がビクトリアで日本や東洋の美術工芸品店を開いて成功しているのに刺激されてであろう——バンクーバーに東洋美術工芸品の店を開店、営業に成功した。

さらに田村は、バンクーバー日系人街受難の年、1907年(明治40)には、日本人移民として初めて彼の地に銀行を設立、日加合同貯蓄会社と命名した。この事業が順調に発展した結果、彼は当時としては実に威風堂々とした前述の建築物をカナダの大地の上に残すことができたのであった。

田村自身は、約14年間のカナダ滞在の後、日本へ戻り、益々その事業を拡大させ、後には貴族院議員等までも歴任するに至っている。いわば「錦衣帰郷」という出稼ぎの志向を持っていた初期カナダ移民の立志伝中の人物とすることができよう。

実際、田村ほど明確に「成功」したわけではなくとも、1880年代、1890年代、1900年代の日本人移民は、多かれ少なかれ「出稼ぎ」根性をもって渡加、渡米しており、故郷への送金・蓄財・貯金に明け暮れ、挙句の果てに、まとまった金が出来ると、晴れて日本へ帰郷する、というパターンを辿った人も少なくなかった。

こうしたパターンが白人系のカナダ人をして、——日本人はカナダに居つこうとしない、永住しようとは考えていない。カナダ国内で働いて、その収益を一から十まですべて日本に捧げてしまう、カナダで得た富をカナダに還元しようとする——等と言わしめることになったことはもって銘すべしであろう。確かに、白人たちから批判を受けても止むを得ないようなこ

うした日本人移民の行動が、白人たちの人種偏見・差別の意識を助長したこともまた事実なのであるから。(断るまでもないが、だからと言って私は、白色人種の他人種に対する偏見・差別を是認するものでは毛頭ない。)

#### (f) その他の男たち

最後に、その他、日本人カナダ移民黎明のころにあって、何らかの意味において一定の役割を演じた男たち何人かを挙げておこう。

新潟県出身で、1886年(明治19)、カナダに渡来、まずヘステングス製材会社(Hastings Sawmill)に就職した後、漁業に転じ、スキーナ河沿岸等、カナダ太平洋岸北方の漁場開拓に努めるかたわら、現地のカナダ・インディアン(ネイティブ・カナディアン)の言語を習得し、彼らとの友好をはかり、遂には彼らから「我等のキング」とまで称された吉沢保吉、カナダで農漁業・貿易業を営むとともに、後進の日本人移民の就業にも力を尽くした相川之賀といった人々は地味ながら、移民社会にあって着実な仕事をした人として忘れてはなるまい。

活躍した時期は草創期からはややずれるが、邦字紙『大陸日報』を主宰し、日本人会を創立、その会長に就任し、第1次世界大戦に際してはその日本人移民社会における影響力をフルに活用して義勇兵を募り、カナダ軍に参加させるなど、かなり強引なキャラクターで派手な行動が目立った山崎寧なども興味深い人物である。

草創期の末期、1906年(明治39)に渡加、伐材関係一筋に歩み、後には日系屈指の会社、花月商会(1915年〔大正4〕設立)を営み、杉の良材等の日本への輸出に携わった花月栄吉。明治維新の傑物の一人、榎本武揚の親族で、メキシコ移民に深い関心をもっていた武揚を助けて、メキシコへ渡り(1897年明治30)頃、同地で活躍した後、カナダに戻り、漁業を営んだ東京出身の榎本龍吉。

千葉県出身で、アメリカ合衆国イリノイ州のイバンスト大学神学部等で学んだ後、1896年明治29)、バンクーバーに創られた日本人美以(

メソジスト) 教会に牧師として招かれ、得意の英語で日白間の軋轢が生じる毎に仲介にこれ努め、カナダにおける日本人移民社会初の新聞創刊——1897年(明治30), 『加奈太新報』となる。)——を敢行するなど、宗教者らしく日本人移民の啓発・啓蒙に努めた鏑木五郎等々、なかなか多士済々である。

(g) 総括的に

移民送出国の側、すなわちこの場合、日本の「国家意志」から見た場合、そして移民を送出する地域社会の側、すなわち私のいうところの部落「共同体意志」から見た場合、移民イコール棄民であった。明確に国家の政策として送出されたブラジル移民や満州移民等<sup>(21)</sup>はもちろんのこと、ストレートに国策とは言えないアメリカやカナダへの移民も、国家や部落共同体にとっては歓迎さるべき「口べらし」だったのである。しかも、彼らは移民先から送金してくるような——日本に富をもたらしうような——存在になるかもしれない、とすれば国や部落共同体にとって移民は2重の意味で歓迎さるべき人々だった。そして北米への日本人移民はごく少数の例外を除けば、移民受入国の側にとって——必要な労働力ではあったかもしれないけれども——決して歓迎さるべき人々ではなかった。歓迎されざる人種でしかなかった。

つまり日本人移民は、送出する側からすると「歓迎さるべき emigrant」であり、受入れる側からすると「歓迎されざる immigrant」だったのである。

それは、北米在住の日系老人たちが異口同音に語る次のような言葉からも明白である。「何のかのかっこいいこと言ってみたって、結局、所詮は『むら』にいちゃあ食えないから」出てきたのであり、「出ていく先は別に東京でも大阪でもどこでもよかったんだけど、先輩も大勢いたし親近感があったのでカナダ(アメリカ)に来た」のだけれども「そこで待ち受けていたのは排斥と重労働だった」のである。<sup>(22)</sup>この平凡な証言は、しかし私のいう「歓迎さるべき emigrant」にして「歓迎されざる immigrant」

という日本人移民の立場を証明して余りある。

(もっともこれは日本人移民に限らず、一般的にどこか一国から他国への移民全般に言えることかも知れない。しかし「排斥」のきつき——強制収容にまで至る——を考えれば、日本人北米移民にその典型を見ることができると言えよう。)

ともかくこのように、客観的には「口べらし」のため、そして自らも口を糊するために、ということの一つの大きなファクターとして人々は移民を決意したのだが、それだけでは割り切れない「何か」が移民の人々にはまつわりついている、と考える。その「何か」とは野心・やる気といった類のものではある。が、それは従来、言われてきたような錦衣行的な出稼ぎ根性ばかりではなく、もう少し本質的な意味で、人間の本性にかかわるところの野心である。

客体としては「口べらし」——だから棄民——というようなマイナス的存在として見られてきた日本人移民が、実は主体としてはより積極的なモチーフをも持ち合わせて海外へ出ていったプラス的存在であることを私は主張したい。そのことは、a~fで固有名詞を挙げて述べた日本人移民のパイオニアたちの足跡から<sup>(23)</sup>も明確におわかりいただけることと思う。

ちなみに、日本人がえてして、移民(この場合、当然 emigrant)をマイナス的存在として見がち、あるいは無視しがちなのは、「もう出ていってしまった者」に対する無関心というヒューマニティの狭量さ、国際感覚の欠如、移民政策の貧困に由来するものではないか、と私は考えている。

おわりに代えて

最早や規定枚数に達してしまったので、誠に区切りはよくないが、今回の叙述はここまでとする。

次の機会には、女性の目から見た初期日本人カナダ移民社会の状況に触れたいと考える。さらに続いて、同社会の状況を、選挙権問題、アメリカ合衆国で興った亜細亜排斥会の運動のカナダへの波及、バンクーバー暴動、日加間のル

ミュー協定締結，第一次世界大戦の勃発等，移民の身边で生じた大状況，小状況との絡み合いのなかで捉えてみたい。

歴史の大きな流れのなかで，時にそれに翻弄されながら，時にそれに抗しながら，生きている民衆，その様々な民衆のなかでも，ことに国際関係の変化等の大状況のドラスティックな変転の影響をもちに受け易い移民，その彼らの「生」を見ていくことによって，歴史と民衆との関わり合いに触れてみたい。

民衆は決して「なりゆくいきほひ」に身を任せて，歴史に流されていくだけの存在ではない。歴史を創造していく存在である。少なくとも創造していくべき存在である，と私は考えているので。

#### 注

- (1) 新保満『日本の移民——日系カナダ人に見られた排斥と適応——』，1977年，評論社，30ページ。
- (2) 「敵性」は，英米では *enemy character*，ドイツでは *feindliche Eigenschaft*，フランスでは *caractère ennemi* と呼称され，文字通り「敵である性質」を意味する。この「敵である性質」は大別すると「人」と「財産」とに付与される。「人」に関して言うならば，「敵性」を持つ国イコール敵性国の「人」ということで「敵性国人」という言葉が成立するものと思われる。

新法律学辞典（新版・我妻栄他編，1967年，有斐閣）によれば，「交戦国は戦争目的を実現するために敵の人と財産に種々の加害行為をすることができるから，どのような人と財産が敵としての性質をもつかが問題になる。原則として交戦国の国民とその財産が敵性をもち，中立国のそれらは敵性をもちない。ただしこれには重要な例外がある。人に関しては，交戦国に対して敵対行為をし，又は特にその利益となる行為をした中立国人，更に敵国にある中立国人も一種の敵性を取得する。中立国にある敵国人は原則として敵性を失う。…人の敵性に関しては能動的敵性と受動的敵性が区別され，前者は直接に加害行為の対象となり，捕虜とすることのできるもの（交戦国の兵力に属する人々，交戦国に対して敵対行為をし又はその利益となる行為をした中立国人）であり，後者は単に間接に加害行為をすることができるだけ

で，捕虜とすることもできないもの（交戦国の平和的人民，交戦国にある中立国人）である。」（869ページ）ことになる。

以上の解説と照らし合わせてみても明白のように，既にカナダ市民である日系の2世や3世はどう考えても（少なくとも国際法の観点からは）「敵性国人」とは認定し難いのである。

他方，未だカナダの市民権を獲得しておらず，日本国籍を有する移民の人々，これは大日本帝国臣民ということになるので，「交戦国の国民」であり，したがって「敵性国人」と認定されても，国際法上は止むを得ないことになる。

しかし，その場合でも彼ら日本人カナダ移民は，受動的敵性を発揮しうる可能性を有する人々に過ぎないのであり（しかも実際的には彼らがその可能性を発揮する可能性はほとんど皆無に等しかった。），「交戦国の平和的人民」として取り扱われて然るべき人々だったのである。

よって，カナダ市民である日系の2世3世を「敵性国人」とし強制収容したことは言うに及ばず，カナダ市民権を持たない日本人移民を強制収容したことも明らかな国際法違反と言わざるを得まい。道義的にも強制収容が誤りであったことは言を俟たない。

なお，米国における日本人および日系人の強制収容に関する私の基本的な見解については，「強制収容の背景に人種差別～根底に横たわる偏見・排斥の歴史～」(『朝日新聞』・論壇，(東京本社版)，1983年9月6日付。)ないしは「強制収容の正当化に反論～市民的権利奪われた日系2・3世～」(『朝日新聞』・論壇，(大阪本社版)，1983年9月6日付。)および『近代日本北米移民の研究』(仮題・近刊予定)を参照されたい。

カナダの第2次世界大戦中における日本人および日系人に対する措置が，米政府の彼らに対する措置に準拠していたことは言うまでもない。

- (3) 新保前掲書，30ページ。
- (4) 米国において，「インディアン」ないしは「アメリカ・インディアン」といった呼称に対して異を唱える向きがあることは周知の通りである。コロンプスの誤った認識に基づいて「インド人」でもない人を「インディアン」などと称するのは，「インド人」に対しても，「アメリカ・インディアン」に対しても礼を失することはなほだしと言わざるを得まい。

その意味で「インディアン」、「アメリカ・インディアン」と称されてきたアメリカ大陸原住民の人々のことを「ネイティブ・アメリカン」(Native American) と称するのは好ましいことである。

と、同様に「カナダ・インディアン」などと称されている人々も「ネイティブ・カナディアン」(Native Canadian) と称されてしかるべきであると私は考える。

- (5) このあたりの記述は、1979年以降、数度に渡るアメリカ合衆国およびカナダにおける筆者のフィールド・ワークに基づいている。
- (6) この「大正市民主義期」の語について詳しくは、拙論「『大正』時代区分論～小時期区分としての『大正市民主義期』の提唱～」(『東海女子大学文学部紀要』・創刊号、1982年3月。)および拙著『ある「大正」の精神』(1982年12月、吉川弘文館。)を参照されたい。
- (7) 私の「共同体」に関する基本的な認識に関しては、拙稿「近現代『共同体』研究序説」(歴史学会編『史潮』・新2号、1977年7月、弘文堂。), 「『共同体』への歴史的視座」および「行動様式としての共同体原理」(いずれも近刊予定。)を参照されたい。
- (8) この「もう一つの太平洋戦争」のストーリーについては、稿を改めて詳述するつもりである。
- (9) 村田聖明「日系人『強制収容』に誤解～人種の偏見との見方は的外れ～」(『朝日新聞・論壇』(東京本社版), 1983年8月18日付。)ないしは「誤解多い日系人『強制収容』～補償には反対運動激化の懸念～」(『朝日新聞・論壇』(大阪本社版), 1983年8月18日付。)
- (10) 注(2)の最後の2節参照。
- (11) 枚挙に暇がないので、ここでは全面的に省略する。
- (12) Adachi, Ken. "The Enemy That Never Was—A History of the Japanese Canadians". Toronto: Mc Clelland and Stewart Limited, 1976. ケン足立著になる本書は、カナダで書かれた日系カナダ人に関する書物中の白眉である。単なる読み物としてだけでなく、研究書としても質量ともに最高峰に位する。ただ惜しむらくは、日本語で書かれた生の資料の活用が見られない。このことは本書の最大のウィーク・ポイントである。彼は1928年、ブリティッシュ・コロンビア州で生まれ、戦時中は被収容の体験を持

っている。トロント大学やメリーランド大学で英語の教鞭を執り、現在は“Toronto Star”紙の記者をしている。

Japanese Canadian Centennial Project Committee. "1877—1977. The Japanese Canadians, A Dream of Riches. 日系カナダ人百年史、千金の夢。Un Rêve de Richesses, Les Japonais au Canada, 1877—1977." Toronto: Dreadnaught, 1978.

日系カナダ人百年祭に際して、同プロジェクトの一つのメイン・イベントとして編まれたのが本書。日系1・2・3世、新移住者その他多くの日系関係者の協力によって完成した。数多くの写真を効果的に使用し、視覚にも強く訴えかける何ものかがある。学問的な言い方でないかもしれないが、その「何もの」かは多分、多くの移民の人々の魂ではないかと思う。この「魂」の存在の故に本書は、書かれている内容以上のことを物語っている。再び言うが、学問的にはこういう共感を露骨に示すような捉え方は許されないのかもしれないが、本書には他の日系カナダ人に関する書物には感じられない「鬼気迫る」ような迫力がある。総文章量は決して長くないけれども、その背後には表面には現れることのなかった夥しい量の肉声や資史料が存在しているのである。

新保満『石をもて追われるごとく——日系カナダ人社会史——』, 1975年, トロント・大陸時報社。

本書も前二書と相前後してカナダで出版された。日本語の叙述であるところに特徴がある。が、歴史叙述としては史料批判がやや甘く感じられ、ノンフィクションとしては盛り上がり欠けると評せざるを得ない。

カナダ日系社会において同書の評価が完全に二分しているのも、——同書のメイン・タイトルからも推測できるように——情緒的な記述のありようにその一因がある。

しかし、それはともかく同書も前二書とともに1970年代半ば——つまり日系カナダ移民百周年前後——に、日系カナダ移民の歴史を残したいという情熱のもとに書かれたものとして、ここで取り上げた次第である。

その他の日系カナダ移民に関する研究論文、学問的著作、ノンフィクション等については、後に作成する予定のビブリオグラフィーを参照された

い。

- (13) “The New Canadian—THE VOICE OF THE SECOND GENERATION—”. Vancouver: April 29, 1942.

戦前（戦中）、バンクーバーで発行されていた日系人向け新聞。特に2世の声を反映したものであった。現在もトロントで発行され、カナダ全土の日系人購読者に郵送されている。

- (14) Con, Harry. Con, Ronald J. Johnson, Graham. Wickberg, Edgar. Willmott, William E. “From China to Canada—A History of the Chinese Communities in Canada.” Toronto: McClelland and Stewart Limited, 1982.

Ma, Ching. “Chinese Pioneers—MATERIALS CONCERNING THE IMMIGRATION OF CHINESE TO CANADA AND SINOCANADIAN RELATIONS —.” Vancouver: Versatile Publishing Limited, 1979. 上記2書が、最新の中国系カナダ移民、中国系カナダ人に関する著作としては出色のものであるので参照されたい。

- (15) 永野萬蔵に関しては、森研三・高見弘人共著『カナダの萬蔵物語—THE FIRST IMMIGRANT TO CANADA—』（1977年、尾鈴山書房。）、“Bulletin Canada.” №12.（日系カナダ人特集、1977年5月、カナダ大使館。）等を参照されたい。

なお、筆者のトロント滞在中に、萬蔵に関し、また日本人カナダ移民、日系カナダ人に関して有益な御教示を下された“New Canadian”編集長、森研三氏に感謝の意を表する次第である。

- (16) 三尾在住の移民研究家・小山茂春氏の調査による。なお、同地のフィールド・ワークの際、いつも有効な御教えを賜わる小山氏、中津ふで氏その他の方々に深謝する。

「アメリカ村」に関して個別的関心に基づくモノグラフは時折り公刊されているが、総合的な調査報告としては、毎日新聞社人口問題調査会のメンバーによる調査に基づく、福武直編『アメリカ村』（1952年、東大出版。）を見るのみである。

ちなみに日本人の筆になるステブストンに関する著作としては、蒲生正男編『海を渡った日本の村』（1962年、中央公論社。）および鶴見和子『ステブストン物語』（1962年、中央公論社。）が

数少ない著作として挙げられる。

- (17) 小林貞二編『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』、1935年、同団体発行、51ページ。

- (18) 中山詔四郎『加奈陀同胞発展大鑑』（附録）、1921年、中山詔四郎発行、112ページ。

- (19) 新田次郎『密航船水安丸』、1979年、講談社。

この新田の作品は、小説という形式をとってはいるものの、綿密なフィールド・ワーク、史料収集探訪に基いて書かれたものだけに、ドキュメンタリー、ノンフィクションと言っても当らずといえども遠からず、厳密に扱えば、資料的価値も十分に見出せる。

及川甚三郎に関しては、新田の作品の他、後藤六郎編『加奈陀密航記』（1936年、自費出版。）などがある。

- (20) 日系カナダ人の第1次世界大戦への義勇兵としての参戦の顛末については、工藤美代子『黄色い兵士達—第1次大戦日系カナダ義勇兵の記録—』（1983年、恒文社。）が様々なことを語っている。

- (21) 戦前の満州への日本人の人口移動は、歴史学上の用語としても「満州移民」と言い慣らわされているようであるが、日本の国家権力の力が移住先にも反映しているなかで国策として実施されたこの人口移動は明らかに植民であり、したがって「満州植民」と称されるべきである。

- (22) インフォマントになって下さった数多くの日系カナダ人、日系アメリカ人の方々が、自らの体験を語る時、ないしは自らの父祖たる1世を語る時、ほとんど必ずといっていいくらい、口にした言葉であった。

- (23) 第5節a～fで述べたストーリーを作成するにあたっては、ステブストン在住の林太郎氏、バンクーバー在住の中野寿雄氏、水田治司氏、故中津貫一氏、トロント在住の小山登氏、佐藤定氏、森研三氏その他、多くの日系の方々から御教示を賜わった。また、プリティッシュ・コロンビア大学・文書館、同大・アジア研究所蔵の史料や中山詔四郎、森研三、高見弘人、新田次郎等各氏の著作も参照させていただいた。記して謝する。

#### 付 記

今回のストーリーの叙述は、私の移民研究におけるイントロダクションのイントロダクションである。私の移民に関するアプローチの窮極的な目標の1つは、

「おわりに代えて」でも少し触れたように、「歴史の大きな流れと一個一個の人間との関わり合い」は奈辺にあるかを知ることにある。

もう1つの目標（勿論、こちらがメインである）は、日本近代において政治的・経済的・社会的に大きな意味をもちながら、“immigrant”としては（つまり移民受入国の側における問題としては）ある程度関心を持たれているけれども、“emigrant”としては（つまり移民送出国の側としての日本との関連においては）まだまだ研究が進んでいるとは言えない移民（特にカナダ移民）に関して、受入国そして送出国の双方において実際に participant observation を行ない、また聞き取りの記録、公私の文書・文献を収集・分析してその実像を描き出し、その後彼らの足跡を日本近代史上に的確に位置づけることにある。

末筆ながら、1982年12月～1983年2月にかけての

ナダおよびアメリカ合衆国における筆者のフィールド・ワークを可能にして下さった東海女子大学の神谷一三先生、高橋悌蔵先生、織田正先生、高橋百之先生、八田重雄先生、その他の諸先生方、御面倒をおかけした小林幹司氏、坂井初夫氏に深甚の感謝の意を表する次第である。

また筆者を、客員研究員として受け入れて下さったカナダ国、ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究所の T.G. McGee 所長はじめ同大の権並恒治氏、萩原孝雄氏にも深謝したい。

カナダ国連邦公文書館 Manuscript Division の Charles MacKinnon 氏、ヨーク大学の John Saywell 教授、在日カナダ大使館の各位の御好意にも感謝しなければならない。

なお、筆者の国内における「移民研究」に対し、1982年度文部省科学研究費（奨励研究A）が交付されたことを規則により記しておく。

#### 〈Summary〉

##### Early Days' Situation of Japanese Immigrants in Canada

Kaoru Amanuma

In this thesis, I intend to tell the story of collective biography of Japanese immigrants to Canada and Japanese Canadians in the beginning. In concrete, their names are Manzoh Nagano, Gihei Kuno, Tomekichi Honma, Arichika Ikeda, Jinzaburoh Oikawa, Shinkichi Tamura and so forth.

In my opinion, Japanese “imin (移民)” s were the people who were given hearty sendoff from their own country, and also they were not welcomed in their new country. Key word o show these facts are “Kimin (棄民)” and “Haiseki (排斥)” or “Hainichi (排日).”

But in spite of these facts, Japanese “imin” s were men who had strong ambition and determined will. In these cases, of course, ambition does not mean “Kini-Kikyo (錦衣帰郷)” or “Ikkaku-Senkin (一獲千金).” It means heart's or spiritual content as a humanbeing.